



矢代は苗の鋭く伸びた明晰な山峽のその路を、父の骨箱をさげ辿って行くうち寺へ着いた。二十数年にもなろうか、この寺の門は彼の覚えのあるものだった。幾もゆるんだ傾きで、風雨に洗われた柱の木理も枯れ決った隙を見せ、山道の嫩葉に触れた門から中の方に、白藤の風に靡くのが一本、静かに過ぎる晩春の呼吸をしていた。

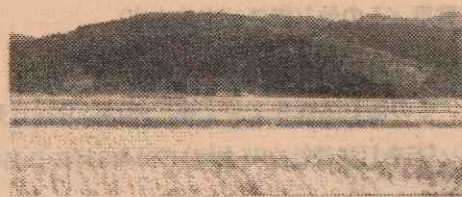
横光利一『旅愁』（講談社文芸文庫）下巻・P456



「ここのお墓は、これ皆あなたさんところのばかりですよ」と、先頭に停った老人が矢代に告げた。他家の墓の一つも混れぬ墓地というものを見るのは、初めてだったので、そう云われると彼もうろたえを覚え、先ずどの墓を主にして拜んだものか見当もつかず、

「祖父さんのはどれでしょうか」と若い和尚に訊ねてみた。

横光利一『旅愁』（講談社文芸文庫）下巻・P468



「俺はここで死んだが、なに、これは一寸、休ませてもらっただけだったよ」

こういうようにも見える山は、少し多弁になりかかろうとして、にこにこすると、またどういものか口を閉じ、

「さア、もう行きなさい」と顎で彼を押す風だった。

横光利一『旅愁』（講談社文芸文庫）下巻・P477

## ～『旅愁』の宇佐を歩く～

ごあいさつ

今年の「横光利一俳句大会」（第3回）には、たくさんのご応募ありがとうございました。おかげさまで、全国より7500句を超える投句をいただきました。宇佐ゆかりの作家・横光利一にちなむ俳句大会を、今後ともよろしくご支援のほど、お願い申し上げます。

さて、今年の俳句大会表彰式は10月27日（土）に、選者のおひとりである倉田絃文先生をお迎えし、当館視聴覚ホールで行われます。これを記念して当ギャラリーでは、文学展『旅愁』の宇佐を歩くを開催することになりました。

横光利一の代表作『旅愁』では、主人公・矢代耕一郎のふるさととして、市内赤尾周辺の人と風土が盛り込まれています。作者自身が帰郷したときの体験が、主人公を通してそのまま描かれていると言われています。

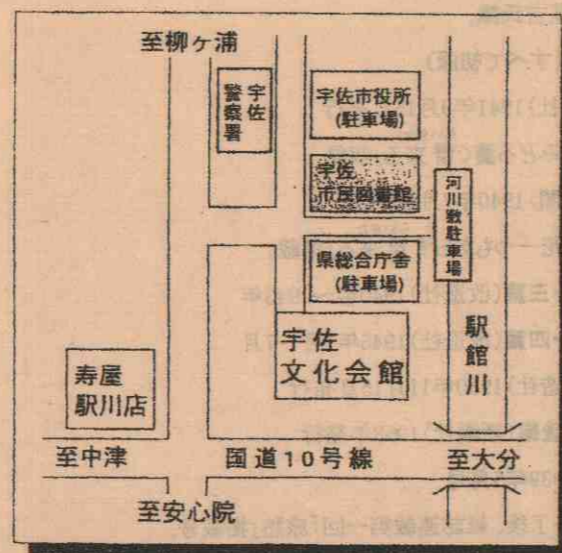
今回の展示では、小説の本文と、現在の風景写真で、『旅愁』の宇佐をたどりたいと思います。

また、この機会に、自筆の俳句色紙ほか、当館が所蔵する横光利一関連資料も展示いたします。

あわせてご鑑賞ください。

平成13年10月

宇佐市民図書館  
渡網記念ギャラリー



平成13（2001）年10月10日 / 発行・宇佐市民図書館  
大分県宇佐市上田1017-1 TEL.0978-33-4600

第3回「横光利一俳句大会」開催記念展

# 『旅愁』の 宇佐を歩く



横光利一『旅愁』文学碑  
宇佐市赤尾（光岡城跡）

2001. 10. 10 ~ 10. 28

10:00 ~ 18:00（日曜のみ ~ 17:00）  
休館日…毎週月曜日・祝祭日・月末木曜日

宇佐市民図書館  
渡網記念ギャラリー



～『旅愁』の字佐を歩く～



「城山というのはどの山ですか」と訊ねてみた。低い幾つもの峯が平野の方へ延びて出ている中央の、一番高まった峯をさして農夫はあれだと答えた。寺へ着いてから村人たちの出て来てくれた後では、彼の思い描いていた場所をひとり静かに歩いてみることも出来そうになく、まだ知られぬ今の中に、彼は先祖の呼吸し、眺め暮して滅び散った館の跡を見て置きたいつもりであった。

横光利一『旅愁』（講談社文芸文庫）下巻・P452



田の中の路の四つ辻の所に石地蔵があって、その傍に駄菓子屋が一軒見えた。矢代はそこで駄菓子とサイダーを買ってから、荷物のスーツケースを一時預かって貰うことにして、父の小さな骨箱だけを携げ山路を登っていった。

横光利一『旅愁』（講談社文芸文庫）下巻・P452



矢代は頂きの石の上に腰を降ろして休んだ。黒松の幹の間から海が見えるのが、ここに横ったものの今もなおする呼吸のように和らいだ色だった。葛の葉や群る笹の起伏する上から遠ざかったむかしのころの面影を想像してみても、たしかにここには、父に繋がるもののかつて刻んだ労苦の痕跡が感じられた。

横光利一『旅愁』（講談社文芸文庫）下巻・P454

出展目録

～『旅愁』の字佐を歩く～

横光利一プロフィール／横光利一年譜／『旅愁』梗概	3点
風景写真	12点
『旅愁』本文(パネル)	13点
『旅愁』マップ(矢代の足跡)	1点
豊前国宇佐郡中津御領矢頭組略絵図(1861年・文久元年)	1点
光岡城跡・西福寺が描かれている	
県営駅館川地区大規模園場整備事業航空写真	1点
(園場整備施工前の宇佐市航空写真・昭和43年撮影)	
横光利一肖像写真(1937年自宅にて)	1点
横光利一と林芙美子(写真)	1点
清水麗画・銀座出雲橋はせ川での横光利一と川端康成(写真)	1点
自筆物「松の芽の伸び美しき雲の峰／横光」	1点
清水基吉氏の箱書きあり。	
1941年11月17日発行『日本読書新聞』(第175号)に掲載。	1点
掲載紙には「米子にて」の前書きがある。	
「夏の花一つもあらず雷来る／横光」	1点
『婦徳』(1941年9月15日発行・有光社)の扉に掲載。	
「河の石青みどろ濃く雷来る／横光」	1点
『秘色』俳句「夏」(1940年7月5日発行・新声閣)に掲載。	
「秋の夜や掘る穴の底に水ありき／横光」	1点
全集未収録。	
「横手初めてぞ心静まれば鮎有りと云ふ／横光利一」	1点
清水基吉氏蔵。	
横光利一著作(すべて初版)	
『秘色』(有光社)1941年9月15日発行	1点
「河の石青みどろ濃く雷来る」収録	
『婦徳』(新声閣)1940年7月5日発行	3点
扉に「夏の花一つもあらず雷来る」掲載。	4点
『旅愁』第一～三篇(改造社)1940年～1943年	1点
『旅愁』第一～四篇(改造社)1946年1月～7月	2点
『旅愁』全(改造社)1950年11月15日発行	1点
『旅愁』前編・後編(新潮社)1958年発行	
『文藝春秋』1939年5月号	1点
新聞連載終了後、雑誌連載第一回「旅愁」掲載号。	1点
『御身』(金星堂)1924年5月20日発行	1点
『春は馬車に乗って』(改造社)1927年1月12日発行	
『機械』(白水社)1931年4月10日発行	

出展目録

『寝園』(中央公論社)1932年11月28日発行	1点
『紋章』(改造社)1934年9月21日発行	1点
『上海』(書物展望社)1935年3月15日発行	1点
『日輪』(沙羅書店)1935年4月25日発行 限定本	1点
『雪解』(養徳社)1945年12月28日発行	1点
『夜の靴』(鎌倉文庫)1947年11月25日発行	1点
木蠟社宛・横光利一、二、三周忌出欠返信はがき(1949,50年)	
石川桂郎、清水基吉、上林暁、寺崎浩、中里恒子	15点
橋本英吉、中山義秀、中河与一、永井龍男、丸岡明	
倉光俊夫、今官一、白川渥、大鹿卓、片山修三	
(および、それぞれの人物紹介パネル)	15点
横光利一、二周忌記念写真(1949年)	1点
清水基吉『雁立』(鎌倉文庫)1946年9月10日発行	1点
『宿命』(俳句研究社)1966年2月10日発行	1点
上林暁『白い屋形船／ブロンズの首』	1点
(講談社文芸文庫)1990年8月10日発行	
『禁酒小説集』(ちくま文庫)1999年9月22日発行	1点
中里恒子『時雨の記』(文春文庫)1981年10月25日発行	1点
『忘我の記』(文春文庫)1994年11月10日発行	1点
橋本英吉『橋本英吉、タクラ・テル集』	1点
日本プロレタリア文学集32	
(新日本出版社)1988年4月30日発行	
中山義秀『土佐兵の勇敢な話』(講談社文芸文庫)	1点
1999年7月10日発行	
『新編中山義秀自選歴史小説集』	10点
全10巻(宝文館出版)1996～1997年発行	
中河与一『天の夕顔』(新潮文庫)1954年5月31日発行	1点
永井龍男『朝霧／青電車／その他』(講談社文芸文庫)	1点
1992年3月10日発行	
『一個／秋／その他』(講談社文芸文庫)1991年3月10日発行	1点
『コチャバンバ行き』(講談社文芸文庫)1991年8月10日発行	1点
『青梅雨』(新潮文庫)1966年5月15日発行	1点
『回想の芥川賞・直木賞』(文藝春秋)1979年6月30日発行	1点
丸岡明『能・狂言物語』古典文学全集14(ポプラ社)1967年2月発行	1点
大鹿卓『寒風』が掲載された『文藝春秋』(1942年7月号)	1点
横光利一の「旅愁」も連載されている。	

計118点